

共通語化最終段階における方言使用状況 —第 1～4 回鶴岡共通語化調査データの公開—

鍵水兼貴, 高田智和

国立国語研究所では山形県鶴岡市において約 20 年間隔(1950, 1971, 1991, 2011 年)で共通語化調査(以下、「鶴岡調査」)を実施している。2017 年からは調査データの公開作業を行っている。本発表では、2011 年の第 4 回調査の結果を追加したデータベースの最新版である「鶴岡調査データベース ver. 3.0」を、2019 年 11 月の公開に先立って紹介する。「鶴岡調査データベース ver. 3.0」では、音声・音韻項目 36 項目について 4 回の鶴岡調査の 61 年間にわたる共通語化に関する経年調査のデータが利用可能である。第 4 回調査の結果は共通語化の進展が著しく、その中での方言の使用状況を考察できる。また、方言使用中心の第 1 回調査から共通語化最終段階といえる第 4 回調査まで、共通語化過程の全体が分析可能となる。

第 1～3 回公開データによる研究からは、①データの個人のばらつきが大きい、②時代が下るにつれて共通語化が進む一方で個人内変化では方言化が進む人が多い、③1940 年代以降の生まれの人は方言化はほとんどみられず共通語化がほぼ完了している、という点が指摘されている。そのため、第 4 回調査を入れたパネルサンプルを含めて、どのような傾向がみられるかを分析した。その結果、①' 第 4 回調査では共通語使用率が 100%に近いと、個人のばらつきが減少した。②' 第 4 回調査では共通語化が優勢であり、方言化はごく一部であった。③' 1940 年代以降でも少数だが方言化がみられ、語中子音の有声化に関わっていることが分かった。全体としては共通語化が完了した段階になったが、③' で 1940 年代以降に方言化した人々は、共通語使用率は第 3 回調査での 100%から第 4 回調査で 70～80%程度まで下がっていた。これは語中子音の有声化項目での方言化であり、実際には、1940 年代以降の生まれの人でも方言音声化した状態でのコミュニケーションが行われていることを示している。